

研究結果報告書

研究結果

本研究は「植民地朝鮮における日本系新宗教に関する思想的研究」を検討するものであり、日本系新宗教の中でも特に「天理教」と「金光教」に焦点を当てて考察した。植民地朝鮮における日本系新宗教の布教活動および社会事業活動は、日本仏教と比較すると社会事業の開始時期も遅く、朝鮮総督府の支援も得られない状況のなかで行われてきた。日本系新宗教の社会事業を思想的な側面から、特に「近代性」を中心に捉えると次のように説明できる。

朝鮮で行われた日本仏教の初期の社会事業は、教育事業を中心に行われてきたが、その対象は主に日本人居留民であった。一方、天理教をはじめとする日本系新宗教の初期の社会事業は、朝鮮へ単身渡ってきた個人布教者によって展開されたが、日本政府からは日本国内と同じように「邪教的存在」と認識され弾圧されると云った厳しい状況のなかで行われてきた。韓国併合以降(1920年代後半)は近代的組織を整え日本政府の支援の中で本格的に社会事業を実施することとなった。社会事業の施設としては代表的なものとして「天理教養徳院」「天理教内鮮同慶会」「木浦公生院」等が挙げられる。

日本系新宗教の初期の社会事業活動の特徴は「病氣治癒」を媒介したことである。日本仏教が近代的「文明」を強調しながら朝鮮人に接近していった一方、日本系新宗教は逆に近代的とは言い難い「迷信」を媒介として朝鮮人と接触したことである。こうした活動は1920年に入ると、日本仏教と同じように「社会性」「植民地的」「帝國的」といった近代的特質を全面に打ち出していくことになる。

本研究で明らかになったことは、植民地朝鮮における天理教・金光教といった日本系新宗教の社会事業活動は、「迷信」「文明」「帝国」「植民地」と云った様々な近代的あるいは非近代的な要素をはらんだ形で実施されていったことである。それが日本系新宗教にとっては何らかの形で「近代的宗教」に変貌する要因のひとつとして影響を及ぼしたのではないか。このように植民地朝鮮における日本系宗教の社会事業は、ある面では植民地の近代化に多少なりとも影響を与えたのかも知れないが、一方では、実施した側である日本系新宗教の「近代性」を問う場合にも、ある意味影響を与えてきたとも言えるのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

2013年韓国日本近代学会 国際学術大会(5月)
諸点淑「植民地朝鮮における天理教の社会事業活動について」
場所未定

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)